

今の学校には潤いがない

—二人の用務員さんに聞く—

聞き手 小 板 邦 男

はじめに

学校の用務員室は狭いながら畳敷きになっていて、私が勤務していた一〇年前頃は多忙ではあったが昼休みなどには先生方が三々五々集まってきて胡座をかいったり横になったりして談笑しながらほつと一息できる場所だった。用務員さんは多趣味の方も多くいろんなことも教えてもらったりした。

今、学校の様子はどうか、ベテランの用務員Nさん(小学校)とYさん(中学校)をそれぞれ訪ねてお話を聞いた。

先生方の病気が心配

「イヤー、最近はそんな余裕なんか全くないね。締め付けというか、どこがどのように締め付けられているか分からないが、とにかくここ二、三年は特に窮屈になっている。たばこは校地内禁煙だし、県や市教委からはあれするなこれするなと重箱の隅をつつくようなことまでがいっぱいあって…」とYさん。Nさん「事務的なこと以外是用務員室でダベリング(おしゃべり)なんて全くない」と言う。
〈用務員室が交流や憩いの場でなくな

っていることがうかがえる。用務員さんの毎日の仕事の一つに学校からの文書類等を教育委員会に届け、学校宛てのものを持ち帰る仕事がある。

Yさん…以前と比べて学校へくる文書が随分と増えている。報告文書など先生方が手分けして書くのだが、ひっきりなしに来るものだから先生方も大変のようだ。書類も書かなければならない。部活は生徒たちだけではなるべくさせるなと言われる反面、一生懸命やれときているのだから先生方もどうしていいか分からないのでないかな。
Nさん…ここ二、三年、学力が落ちていると言われるようになってからと思うが学校の様子がガラッと変ってきたように思う。五、六年前頃にはそれでも休み時間に子どもと遊んだりちよつと休憩し

たりしている姿も見られたが、最近は教務室にはほとんど誰もいない。居たとしても黙々と机で仕事とかパソコンと睨めっこ、他の先生は教室で仕事や授業の準備やかたづけなどをしている。例の小針中での業者との癒着事件*以来、経理の方もハンコ、ハンコで大変煩わしくなっている。何か事件がある度に他の先生方にも厳しくなってくる。息つく暇もない様子だ。個人情報が入っているフロップピーは自宅に持ち帰れないなど…朝は七時頃に出勤する先生や夜は十一時近く頃に帰宅する先生もいる。仕事のことで頭がいっぱいなのか話しかけても返事が返ってこなかったこともある。先生方の間には和やかな会話や笑い声が少なくなってきたよその世界のような感じがする。行事などの後の飲み会(慰

労会)でもなかなか心を緩めない。若い先生でもまるで型にはまっているような先生が多くなったように思う。

こんな状態でいい教育ができるだろうかと疑問に思う。何よりも先生方が病気になるのではないかということはいちばん心配している。(子どもと直接に繋がらないような仕事が増えます、それに追われて現場の先生方が苦悩している姿が見える。)

用務員さんと子どもたち

〈用務員さんは、先生方の目がよく届かない休み時間などの子どもたちの様子もよく知っている。以下はそのなかのいくつかである。〉

Nさん：以前とちがって子どもたちの遊び方が変わってきているようだ。テレビの影響だろうか、

低学年の男の子たちが「遊びだ」と言いながら本気出して友だちの腹を足で何回も蹴ったり、サッカーのキックと言って思いきり蹴っている。その都度、止めさせているがそういうのを何回も見ると、今の子は手加減を知らないのではないか。

Nさん：PTA作業などで一緒に仕事をする中で親たちと親しくなる。ある父親から「どうだろうね、うちの子は…」と聞かれて「先生がいるからいいねかね(いいではないかね)」と言うと「いや、先生はいいことしか言わない。お前さんから見てどうかをぜひ聞きたい」と言うので、「そうだなあ、なかなかのキカン坊だね。うちに帰ってから叱るなね(叱らないで)」と率直に言った。(小さい学校だと一人ひとりの子がよく分かる。親との

信頼関係にある微笑ましい話である。

Yさん：数年前の中学校にいたときのこと。小学校の頃はいじめっ子だったのが中学校にきたら逆転していじめられっ子になった。休み時間などには逃げ回っているのを見て「俺のそばからぜったい離れるなよ」と守ってやったことがある。

Yさん：一〇年程前の中学校（大規模校）でのこと。昼休みにいつも3〜4人の男子生徒が遊びにきた。その子たちに囲碁を教えたことがある。しばらくするうちに負けることもあった。〈用務員室は中学生にとっても当時は気楽な場所であったようだ〉。

まとめ―用務員さんと学校

私が現職の頃（約一〇年前）には、用務員さんのほとんどが地元出身

者で地域や校区のことをよく知っていた。地域の情報も聞けたり、校外学習などでは参考になることも聞けた。用務員さんは地域の窓口のようなものであり、地元出身の用務員さんの存在は学校にとって大きな意味があると思う。

〇七年四月、新潟市は十四市町村にわたる広域の大合併が行われた。合併の際に旧新津市の用務員さんの組合が合併後の人事異動について市当局との交渉で「本人の希望がない限り他区への異動はしない」ということが申し合わされた。ところが今年の異動で一人の用務員さんが本人の意に反して全く事情も分らない遠い他区の学校に異動させられたという。

これから市職員というだけの理由でこのような広範囲な異動がなされるとすれば、用務員としての

学校での独特の存在意義が失われていくのではないかと危惧される。

かつて「学校はオーケストラの演奏で聞いたことがある。校長は指揮者、教頭はコンサートマスター、そして用務員も含め全職員がそれぞれの個性や能力を発揮して教育にあたる。その中でこそ子どもたちは大きく成長することができ」と。よく真理をついた比喻だと思ふ。

それから二〇年余、学校は今、指揮者は指揮棒の振り方まで細部にわたって上から指示され、不協和音を奏でているような気がする。

*新潟市立小針中学校の技術・家庭科の一教諭が教材納入の業者と共同して不正な利益を得た収賄事件。

（こいたくにお・研究所所員）